

日本漢方協会通信

2022年 1月

～御種人参の由来について～

会員の皆様あけましておめでとうございます。
昨年はコロナ禍のなか通常の講座、青空研修会、薬局製剤実習、学術大会とご参加いただき誠にありがとうございました。

今年も会員の皆様にとってより良い漢方の学びの場となりますように、三上会長のもと役員一同協力して臨みたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

さて、日漢協通信1月号は「御種人参の由来について」のあらすじを書かせていただきます。青空研修会で、日除けのための寒冷紗の下で栽培されているオタネニンジンを観察されたと思います。初夏に淡緑色の花(写真①)を、夏には赤い果実(写真②)が見られ、葉は5枚の掌状複葉を3～4個輪生します。

(写真①)



(写真②)



局方ニンジンの基原は「オタネニンジンの細根を除いた根またはこれを軽く湯通したものと謳っています。朝鮮人参、高麗人参あるいは薬用人参などとも呼ばれています。

朝鮮人参は中国東北部や朝鮮半島が原産で、日本には自生しません。

人参は日本へは古い時代から渡来し、朝鮮から対馬藩を通して輸入していたので朝鮮人参の名があります。

庶民が利用できるようになったのは江戸時代からで、朝鮮から輸入された人参は江戸の対馬藩上屋敷で売られていましたが、需要が高まると一般向けに人参座と称して座売りを始めました。

元禄時代には空前の人参ブームとなり人参を買うために身売りをしたり、品薄になった時は店先で騒動が起き社会問題となりました。

需要と供給のバランスがくずれ人参の高値が続き、幕府は人参貿易の決済だけに用いられる“人参代往古銀”という特殊な通貨を用意してまで、人参輸入を図らねばならなくなりました。

このことが幕府財政を圧迫するようになり、八代将軍吉宗はその改善と人々の需要に応えるため人参の国産化を目指すことになったのです。

朝鮮の宮廷医であった許浚が著した『東医宝鑑』1613年を吉宗は高く評価し、同書に記されている生薬の物産学的なことに強い関心を持ち、釜山に設けられた日本人居留域である倭館を通じて享保6年「朝鮮薬材調査」を命じました。

早くも享保6年(1721)から享保13年(1728)まで6回に渡って、倭館から人参種苗が献上されました。そして献上された種苗は小石川御薬園、日光、佐渡で栽培化が始まったのです。

長年の試作から栽培には冷涼な気候が適していることがわかり、人参の栽培は日光を中心に行われることになりました。そして日光産人参が“和製人参”として江戸で販売されるようになり、これにより国内の人参需要が満たされ、銀の海外流出にも歯止めがかかり、天保年間(1830~1844)には清国へ輸出するまでになりました。“和製人参”はその後行政では“朝鮮種人参”の名が用いられ、そして大阪の仲買人が官製品に対する敬称として“朝鮮御種人参”といい、やがて“御種人参”と略した言い方もされるようになりました。これは正規の名ではなく、“オタネニンジン”といわれるのは明治以後のこととされています。

この“オタネニンジン”の名称が現在の局方ニンジンの基原植物となったのです。

人参の栽培化は原産地の朝鮮や中国より早く、世界でも初めてのことです。

しかも流通市場にのせ国内の需要が満たされるまでにこぎつけた当時の人々の鋭意努力に敬意を表します。

薬用植物観察会 熊井 啓子



今年度も、会場の変更等で大変ご迷惑をお掛け致しました。会員の皆様にはご理解ご協力頂きまして心より御礼申し上げます。明年も宜しくお願い致します。